

文化遺産を見つけ、育て、生業とする

「我々の実際の生活が魂を下してゐる限り、これが美しくなくて、何であろうか(坂口安吾)」



日時：2021年2月7日(日) 13:30-16:30

会場：ハイブリッド(オンサイト・オンライン)の予定

対象：金沢大学の学生および大学関係者

※ コロナ禍を踏まえ学生および大学関係者のみの参加とさせていただきます。

参加登録：下記の連絡先まで、所属先を明記の上、メールをお送り下さい。追ってURLをお送り致します。

主催：金沢大学新学術創成研究機構

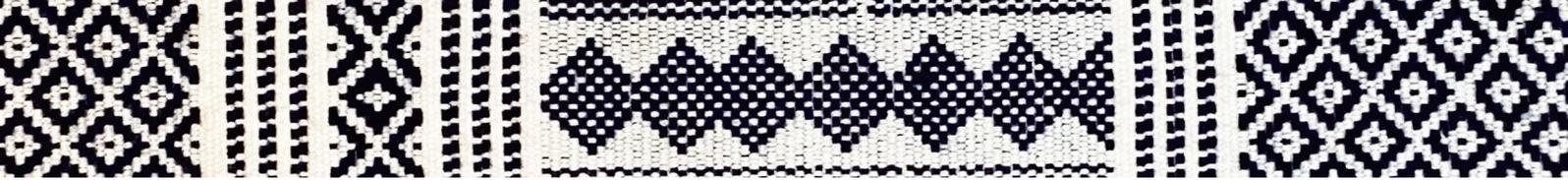
共催：金沢大学人間社会研究域附属国際文化資源学術研究センター

問い合わせ：谷川 | tryuichi☆staff.kanazawa-u.ac.jp (☆→@)

文化遺産といえば私たちはモノをまず思い浮かべてしまう。しかしそもそも多くのモノは、それを育み、使い、生活の実質をそれで形作っている人々とともにあったはずだ。そしてそれらは過去のものではなく、不断に生み出され続けている。建築家B.タウトは「日本文化私観」で桂離宮を始めとする美しい日本の伝統文化をモノに見たが、小説家・坂口安吾は第二次大戦の戦禍のなかでタウトに反駁する。「我々の実際の生活が魂を下してゐる限り、これが美しくなくて、何であろうか」(※)。つまり、文化とはモノではなく、生活が魂を下ろすところにこそある、というわけだ。その安吾の言葉は、文化遺産を議論する今日の風潮に対しても今なお有効だ。文化を眺めるとき、私たちはそこにある魂と向き合っているだろうか。文化遺産を残そうとする意志を持つことも大切だが、コロナ禍のなかでこそ仕切り直して考えたいのは、その意志自体が湧いてくる、その美しい現場である。今年のシンポジウムは金沢大学の学生および関係者にオーディエンスを絞ることとし、モノやコトに魂を吹き込んで生きる人々の活動紹介を通じて、文化遺産をめぐる仕事の広がりや社会を切り開く可能性を共に考えてみたい。

(※ 坂口安吾「日本文化私観」『坂口安吾全集』第03巻、筑摩書房、1999年(初出は1942年))

1. はじめに——機構長挨拶
中村慎一(新学術創成研究機構・機構長)
2. 趣旨説明
河合望(新学術創成研究機構・教授)・谷川竜一(同・准教授)
3. 発表
 - ① 荒物に文化がやどる瞬間—東北の織物“しな布”が工芸品になるまで
荒井 恵梨子(金沢大学大学院博士後期課程)
 - ② 職人文化人類学事始め—研究から実践へ
ワタナベユカリ(株式会社 仕立屋と職人 代表取締役)
 - ③ 文化の「遺産化」にどう抗うか?
—「内灘闘争—風と砂の記憶—」展をめぐる
稲垣健志(金沢美術工芸大学 准教授)
 - ④ 役割の組み合わせから新たな価値を創造する
石原ゆり奈
(特定非営利活動法人 Support for Woman's Happiness 代表)
4. ディスカッション
 - ① 全体コメント
石村智(東京文化財研究所 無形文化遺産部)
 - ② ディスカッション
5. まとめ(河合望・谷川竜一)



発表要旨

① 荒物に文化がやどる瞬間－東北の織物“しな布”が工芸品になるまで

金沢大学大学院博士後期課程 荒井 恵梨子

現在は国指定の伝統的工芸品として登録されている東北地方の山間部の織物「しな布」は、かつては生活必需の荒物として流通してきた。本発表では1960年代から行われてきたしな布をめぐる製品開発に着目し、生産者たちが日常の“荒物”にどのような思いで向き合い伝統工芸品として育まれてきたのか、その過程が周囲の人々や当事者たちにどのような影響を与えてきたのかについて触れる。

② 職人文化人類学事始め。研究から実践へ

株式会社仕立屋と職人 代表取締役 ワタナベ ユカリ

伝統工芸／伝統産業の職人の元へ「弟子入り」という名のフィールドリサーチをメインに徹底したりサーチを行い、そこから次の100年をつくるために職人の「DNA」を抽出、その「DNA」を分析し職人にとって最適な一手を実行する、ということを行なっている。この活動から、職人文化人類学の必要性を認識。これは実験的検証段階であり、「セオリー構築」と「実践」の柔軟な相互作用の効果と必要性をこれまでの経験から提言する。

③ 文化の「遺産化」にどう抗うか？——「内灘闘争一風と砂の記憶」展をめぐる

金沢美術工芸大学 准教授 稲垣 健志

本発表では、2018年に金沢美術工芸大学の教員と大学院生らが開催した「内灘闘争一風と砂の記憶」展を振り返りながら、内灘闘争やその記憶・記録を「遺産」に閉じ込めず、いかに我々自身の問題として引き受けていくか、その可能性や方法を探る。

④ 役割の組み合わせから新たな価値を創造する

Support for Woman's Happiness 石原 ゆり奈

ラオスで障がい作業所を運営し、職業訓練指導を行いながら製品作りを行っている。製品にはラオスの多様な少数民族の織り、染め、刺繍、糸を使用し、障がい者雇用を促進するだけでなく民族文化保護の側面も持つプロジェクトとなっている。障がいや貧困を理由にせず必要とされるものを作り当事者が自立していくのが目標。

